

記九及び義淨の西域求法高僧傳上共に那蘭陀寺の創立者は摩揭陀國王鑠迦羅阿迭多王 *Satradya* (譯曰帝日) であつて、其後佛陀毬多王 *Buddhagupta* 毘揭他毬多王 *Tathagatagupta* 等の諸王が漸次増築し、立并入竺の當時は恰かも其の最隆盛であつたのであるが、後蜜教が興起し毘柯羅摩戸羅 *Vikramaditya* 寺が其の中心となるに及んで那蘭陀寺は衰微した。従つて無著が那蘭陀に住して十二ヶ年講學したといふのは西藏にのみ傳はれる後世の誤傳で、恐らく事實ではあるまいと思ふ。且つ西藏傳には王舎城に於て無著が入寂し、その遺跡に諸弟子が堂を建立したと言ふけれ共、西域記卷九の王舎城の條下には何等無著の遺跡が記されてない。のみならず世親傳では世親の入寂した場所を阿踰陀としてゐるから(西域記卷五同之)恐らく無著も亦阿踰陀の僻地に於て靜かに永眠したものであらう

先 德 餘 香

と吾人は推考するのである。而して諸傳を綜合するに無著は餘程の長壽を保つたのは事實らしい。然し正確な年齢は勿論不明である。(終)

(附言)

本稿起草に際し寺本婉雅教授が萬苦を忍耐して西藏より特に將來せられし *Taranatha* 著印度佛教史の原語譯の借覽を筆者の爲めに快諾し下されし事を篤く感謝する。

先 德 餘 香

後學 南條 文雄集

易行院法海講師之詩熊本所見

美人畫贊

佛言大魔王、或說過大蛇、噫吾何翳膜、唯見顏如花、

雲華院大舍講師之詩各地所見

辛卯(天保二年)元朔

祖山依例拜年新、佛日皇風及小臣、讀起彌陀經

一卷、磬聲先報太平春、

在加賀小松本光寺、寺主請唱和于大方諸

彦

曾題拙筆玉山樓、今對玉山當面秋、雲耶是雪兩

難辨、昨雨今晴未露頭、

一聯

老僕司厨分菽麥、雛僧寫字辨焉烏、

甲午(天保五年)三月七日訪吉田(信濃)善

敬精舍錄實

一箕功成日、林泉見自然、今來非偶爾、水石

舊固緣、

丁亥(文政十年)五月望觀大府使入朝

關東使者入皇京、士女如雲拜太平、一體君臣

天意喜、泥塵時雨玉墀清、

乙未(天保六年)九月題蘭竹石之畫

擇友唯依石、同芳獨有蘭、

開華院法住講師之歌詩(據戊辰庚午辛未日記)

如夢見故國(慶應四年戊辰閏月二十五日壬申)

まぼろしに見るぞ嬉しき父母の深きめぐみの越
の海づら

小牧山にて明治三年庚午二月十四日庚戌

きみと臣の道まごひせし豊臣の夢おごろかす松
風やこれ

謹奉詠庚午涅槃會同年二月一五日辛亥

三千年の鶴の林にすむ月をわが大谷に見るぞ嬉

しき

發藤枝驛到三軒屋村見三樹三分松同年四月二十

六日
壬戌

一木即三三即一、看々松樹性圓融、當年憶起舊

時句、大道本來無異同、

霜月朔日壬辰、冬至也、自文化七年庚午朔旦

冬至已來六十一也矣、同年、案文化三年開華院師生

朔旦清明冬至時、新開東海白梅枝、老心愚拙無

成事、六十一年來復兒、

六日丁酉晴、今曉寅刻、夢中入江戶三緣山

増上寺非二東叡山、寛永寺一殿、正拜先師慧澄律師、拜、聽觀

經妙宗鈔眞身觀疏鈔依光故即生五字、覺後

造一偈、

夢登緣岳謁先師、講座清々各有規、訓誠分明

攝取意、即生文字佛心慈、

十四日乙巳夜分初雪

豐年嘉瑞滿田塘、明月堪思夏夜霜、仲冬幾望寒

將至、萬樹開花如暗香、

十二月八日己巳晴、辰刻發行、鈴鹿雪一尺

ふり出て越えゆく伊勢のすゝか山すゝにはあら

ぬ今日のしら雪

十四日乙亥、辰刻小雨、今日節分也、終日

寒風、

長閑なる春は隣になりぬれど鬼やらふ風は寒ぞ

ありける

賀赤塚善行寺靈轍六十初度之壽明治四年辛未正月十七日丁

先徳餘香

未

壽曆如華々曆人、文人墨客賀筵新、長生眞訣君

知否、壽佛尊前六十春、

拜命任大講師、還東殿對酌、造偈曰、五月十二日辛

日辛

不往淨郷乘樂臺、東園仙鏡洗塵埃、新加大谷

講師命、靈瑞君思一日開、

無題九日己丑

福の神寶の山を施せごうけ取る人のなきぞ悲し

き

附録 副島種臣伯明治三十八年一月見贈小

栗栖香頂贈講師之尺牘

昨年告君以勿死而不死也、我軍忠勇百戰百勝

者在精神勇往也、道自道也、此(一字不明)豈不然乎

佛所云心王如來者此道是也、精神之所以精神

也、吾元日有詩云、

天皇覽賀御楓宸、戸々旗竿昇旭新、此多敵人

一五一

六一七

納降至、由來元日是嘉辰、

一月六日

種 臣

香頂師座下

雲華講師之詩

講般若之日分韻賦一偈文化十三年
年四十四

法海翻波若。放光動地時。空々淘有相。妙々

入無爲。蓋擁金貌座。花開白鷺池。幽深酌一

沫。講讚賴基師。

丁亥五月望觀大府使入朝文政十年
年五十五

關東使者入皇京。士女如雲拜太平。一體君臣

天意喜。滄塵時雨玉堦清。

甲午三月七日訪信州吉田善敬精舍錄實天保
五年

年六
十二

一簣功成日。林泉見自然。今來非偶爾。水石

舊因緣。

在加賀小松本光寺作

會題拙筆玉山樓。今對玉山當面秋。雲耶是雪兩

難辨。昨雨今晴未露頭。

觀大字火

東山天欲暮。大字火紅明。傾城人仰野。歟滅空
無聲。

五岳老人之詩(羅細川千靜之錄送)

林外先生有慰予病詩次韻呈皇

一讀頓覺宿痾空。驚君筆端具神連。扁鵲倉公所

不會。陳琳檄文亦遜功。此奇從來世間無。來自

天心月胸中。二豎狼狽失其據。快如楚火燒秦

宮。欲借東君書未奏。力疾徒唱護花咒。雨

師風伯真無情。逐紅驅紫不沙宥。但恐芳事枕

上殘。駐春計策百方究。君不見病僧顏色忽欣々

霍然起來役吟魂。參苓桂葛不復用。酒榼茶籃

游具紛。明日得觀先生賜。歌舞山雪龜陰雲。

有人品我詩比薯蕷汁者戲作薯蕷汁詩

誰將妙喻品吾篇。蔬苟空廿三十年。薯蕷常慚

伍凡味。滯沓相遇得良緣。縱加鹽鼓白如雪。

纔觸齟牙淡似烟。一飽終無解嘲意。高吟仰臥腹便々。

明治六年三月一日遊至誠上人房觀盆梅賦

呈

上人愛梅無花時。衆人愛梅有花日。愛無花時爲有花。花開卽見培養力。有紅有白有濃淡。盆梅百種色各別。或有老骨傲然蟠。高士猶臥山中雪。或有風姿灑然清。美人欲來林下月。休笑盆中屈此身。能逢知己心乃足。梅也深荷上人恩。四時愛護待佳節。愛有花時衆人皆。愛無花時上人獨。

古鏡

免見雪華粘鬢邊。却憐銅色不澄鮮。投閑久沒黃泉底。依舊重來白前。韜晦如人在浮世。朦朧似月隔輕烟。當年曾識嬌施面。懶向今時照醜妍。

古劍

先德餘香

老龍猶未躍延平。函底依然三尺橫。維莫維干逢聖代。換牛換犢助農耕。燈前看處鬼神哭。月下磨時風雨驚。今日世間無季子。徐君墓樹鳥空鳴。

予有一瓢其狀極醜名曰山妻

不妨便腹引嘲語。吐聖吞賢德亦馨。酒債任他行處在。世途令我醉中經。孟光恰好謀俱隱。屈子也難成獨醒。永與山妻相對酌。祝神何更學劉伶。

鼠齧足

鼠齧足血淋漓。未遑燻穴磔殺之。畏縮三日臥不起。唯求靈藥與良醫。君不見互市幾處接洋虜。黑白羣鬼粉如鼠。皇國人情原寬大。唯道小醜不足慮。嘗糖及米語不誣。果使天步苦崎嶇。嗚呼齧我足已可戮。鼠輩何事齧天足。

天草洋用賴山陽韻

長風破浪心飛越。未現薩山青一髮。空洋無明

遮眼前。唯見龍鬣頻出沒。呂宋琉球果何邊。天連水處有落月。

西江月。曾在吳宮照美人。

狂花

讀長三洲潛伏之日題酒家壁間詩次韻
誰知大澤有潛龍。際會竊期雲又風。貯得胸中兵十萬。何須學劍白猿公。

櫻樹放春々不眞。狂花獨喜艷姿新。無端忽被秋風觸。宛似返魂香裏人。
鐵翁禪師見贈湘水蓮實賦以謝

癸亥（文久三年）仲冬十七日大雪早曉訪夕田詞兄

纔披書牘意先香。君子新來自遠方。他日花開小窓下。一盆秋水亦瀟湘。

酒旗凍不動。大雪滿村籬。忽爾考僧到。閑爐燒兔時。

明治十年七月扈大法主自肥後熊本向筑後柳川途上

拜竹田翁舟中所寫心經有此作
啾々鬼哭暗中聽。毒鱷吹波海氣腥。命托孤舟輕以葉。一心不動寫心經。

法駕或留農父門。貴而忘貴道愈尊。看他老幼來相拜。一碗呈茶木葉村。
耶馬溪

題二十五年前所作自畫山水圖
二十五年前作此圖。無規無矩墨痕迂。更題數語填餘白。併見今吾與古吾。

奇姿恠狀各嵯峨。一路觀山緩々過。誰寫馬溪真面目。惡詩惡畫不堪多。
題自畫富山圖

臘日掃煤偶得古鏡于塵埃之中
黯々久沈僧舍塵。能知好醜已無因。傷心不獨

雲端古雪寒。一白衝元氣。獨立五洲中。傲然稱不二。

雲華師得枯龍賦呈

一畫纔成題一詩。禪餘興動筆頻揮。雲烟却起高僧手。鉢裡老龍眠不知。

松方知事(現今元老)在東京奉皇我所藏大瓢副以一絕

鷗邊秋水淨泠々。坐見雲山浸影青。太守重來定何日。智僊猶護醉翁亭。

題白畫

何人作此畫。熟視乃吾矣。畫成三十年。捐在敗紙裡。比之今日畫。孰非又孰是。此心原愚癡。命之毛錐子。定知一生問。依然舊拙技。

沖岳中林君寫我真戲題

君筆能寫吾。使吾別有吾。世上無知己。笑對畫中語。

大正十一年七月四日朝在福井西又旅館樓上清書畢。壁間有橋曙覽氏之和歌如左。

部公一聲

先德餘香

二聲とせぬもうらみず郭公聞得ざる夜におもひかへして

開華院法住講師碑銘

南條文雄撰

師諱法住、初名周山、後法諱曰嚴昭、號東水、蓮正寺義秀之次子也、文化三年、生于新潟縣佐渡郡新穗村北方、幼好學、文政六年、年甫十八到越後出雲崎、入長生院智現之門、學宗乘及天台、二年之後、決志到三河、爲妙音院了祥之弟子、居十有一年、業大進、後屢講宗乘于越後、天保十四年、遂到江戸、爲傳久寺了諦之義子、弘化二年、爲其住職、當是時、慧澄律師在寬永寺、師乃列其講肆、窮台宗奧義、又入高倉學寮入開悟院靈旺之社中、嘉永二年、爲擬講、號開華院、安政二年、奉法主之命、調理能登頓成之異義、江戸講者之名漸高、五年、讓住職于其義子、轉赴三河、爲寺部守綱寺住職、兼支坊名古屋守綱寺、文久元年、進嗣講、明年、罹中風症

然講說不懈、明治四年、爲講師、七年八月三十日癸、時年六十九、師之著書、其數頗多、而受

業之徒、亦不爲尠矣、師有一子、名曰多喜丸、

先歿、余曾在高倉學寮、列師之講筵、因應請叙

其略歷、係以銘、銘曰、

音吐朗々 如無疾人 眼光炯々 爲法忘身

摧伏邪義 轉正法輪 華開見佛 眞宗法臣

大正十一年壬戌八月二十有五日

新刊紹介

從容錄講話 卷五 秋野孝道著

本書は秋野孝道師が大正四年春以來、約七年間は互り、日本俱樂部禪話會の請に應じて講話せられたものを専門の速記者に速記せしめたものである。從容錄は宏智和尚と行秀禪師の共作とも云ふべきもので、碧巖錄と相並んで禪錄の變遷と云はれて居る。苟も參禪の士たるもの、先づ以て參究せねばならぬ書物である。本書は速記録であるからに稍繁重の點もあるがよく、老師の面目を躍如たらしむる實に丁寧親切な講義である。第一則世尊陞座から第五十則雪峯甚麼までを収めて居る。菊版六百四十八頁の大冊である。

(發行所東京丙午出版社、價五、〇〇、廿一)

阪東本教行信證複寫本

大谷派本願寺編纂課

今回、立教開宗七百年記念として、大谷派本願寺編纂課から、阪東御草本教行信證のコロタイプ版が發行された。本書は従來淺草大谷派別院寶庫に固くとざされて、何人にもたやすく見られなかつたものが、かうして明るみに出された事は、先以て慶ばしい。寫眞はすべて原寸大であり、頗る鮮明に印刷せられて